

コンビニが目指す電子タグ活用のレジ簡便化

◆ローソンが業界初の完全自動セルフレジ実証実験

近い将来、どのコンビニに行っても、レジ待ちの長い列にイライラすることなく買い物ができる日が来るかも知れない。

「次世代コンビニエンスモデル」構築を目指すローソンとパナソニックは、経済産業省の支援を受けて、2016年12月より業界初となる完全自動セルフレジ機「レジロボ」の実証実験を行った。さらに17年2月からは、電子タグ（RFID）を導入した新たな実験を実施し、商品に電子タグを取り付けることで、バーコードのスキヤンを不要にし、精算時間をより短縮化した。電子タグを使ったセルフレジが実用化されると、商品の在庫管理や流通過程、食品の賞味期限の確認などが、人の手を介さずに瞬時に把握できるので、コンビニの経営効率化だけにとどまらず、メーカーや物流業者の負担軽減にもつながる。

コンビニ業界における電子タグ普及の最大の課題は、生産コストだ。現在1枚あたり10～20円程度で、単価の低いコンビニでの導入の壁となっている。経済産業省は、17年4月、コンビニ大手5社と「コンビニ電子タグ1千億枚宣言」を発表し、1枚あたり1円以下に抑えることを普及の条件とし、25年までにコンビニで取り扱うすべての商品に電子タグを貼り付ける計画だ。

◆究極の簡便化、レジ精算不要を目指す「Amazon Go」

一方、海外では、米アマゾン・ドット・コムが目指す究極の簡単支払い、レジ精算不要のコンビニ「Amazon Go」が大きな注目を浴びている。人工知能やセンサーなどを組み合わせることで、商品を手に取ってそのまま外に出るだけで買い物ができるようにした。会計用にAmazonの口座を開設し、スマホで事前に専用のアプリをダウンロードすれば、だれでも利用可能だ。第1号店が、17年前半にもシアトルに出店予定だったが、システムの不具合が生じスタートが遅れる模様だ。

また、中国・北京では一部のスーパーに「セルフレジ」が登場したことで、ネットショッピングに慣れた若者がスーパーに戻ってきているとの報道もある。精算方法の簡便化は、店舗の大きな革新につながる可能性がある。 【秋元真理子】